

『じゃりん子チエ』と釜ヶ崎

——地域性が織りなす物語——

加 賀 谷 真 澄

はじめに

漫画『じゃりん子チエ』は、大阪の町を舞台にした物語である。主人公の竹本チエが暮らす「西萩」町は、ホルモン焼き屋、うどん屋、おこのみ焼き屋などの飲食店の他、宿屋、ねじ屋、周旋屋などの種々雑多な業種の看板が掲げられた店々がひしめき合うように立ち並ぶ商店街として描かれている。この商店街で、チエは、小学五年生の少女でありながら、一癖も二癖もある、あくの強い「西萩」町の大人たちを相手に、毎晩ホルモン焼き屋を切り盛りしている。彼女の口癖は、「ウチは日本一不幸な少女や」というものだが、しかし、それは慨嘆の言葉には聞こえない。そこに感じられるのは、少女ではなく、自嘲気味に自己を突き放して眺めることができる、大人の感覚を備えた存在である。

青年雑誌に連載された『じゃりん子チエ』が、世に広く知られるようになったのは、児童向けにアニメ化されたことがきっかけであった。同作品は1978年、青年向け漫画雑誌『アクション』誌上に初めて登場した。すぐに人気漫画となったこの作品は、その後1997年まで続き、総巻数は67にまでのぼった。『じゃりん子チエ』がここまで長い間人気を保ち続けた理由の一つには、この作品が児童向け作品として映画化、TVアニメ化され、全国的に人気を博したことが挙げられる。さらに、漫画、アニメとしての成功にとどまらず、大人向けに舞台化もされていることからわかるように、幅の広い年代層に楽しめる作品であったことも、もう一つの理由であろう。物語の主軸となるのは、竹本一家に起こる出来事であり、町の住人や、猫たちの話がサブプロットとして絡み合う。ジャンルとしては世代を問わず楽しめる、ファミリーものに分類される作品だと言える。

ほとんどのエピソードは「西萩」町の中のみ限定され、閉じられた空間の中で展開されている。パターン化されたプロットや、くつきり色づけられたキャラクターたちは、町から出て行かないことで安定している。『じゃりん子チエ』の物語世界は、地域色が強く打ち出されており、「西萩」という町の特色が、物語の成立に大きく関わっていることが明らかである。では、「西萩」町はどのような町なのだろうか。

物語に描かれる「西萩」町は、その細部や住人たちを見れば、日本の、あるいは大阪のどこにでもありそうな庶民の町とは言い難い。「西萩」町の住人は、下層労働者、ヤクザ者、定職につかず、昼間から飲んだくれる大人たち、そして子供たちである。

「西萩」町には賭場があり、ヤクザの組事務所がある。この町は、社会的規範からはずれた大人と、チエのような子供たちが共存している町なのである。

「西萩」町にはモデルとなった町がある。それは、作品が映画やTVアニメ化された影響で、通天閣のあたり一つまり、新世界であると、一般に受け止められている。しかし、漫画の中では、舞台が大阪のどこかの町であることだけが示され、作者のはるき悦巳は、モデルとなった町を特定させないように描いている。『じゃりん子チエ』の漫画版が映画、アニメ化された時に加えられた改変は、あいまいなままにされていた物語の舞台が、明確に新世界に設定されている点である。しかし、作者がほとんど明かすことのない事実を言えば、実際にモデルとなったのは、大正期以来、労働者の寄せ場として、貧民地区として、周辺地域から社会的に隔離されてきた歴史を持つ「釜ヶ崎」という地域なのである。

本論では、『じゃりん子チエ』の物語世界に、舞台となった地域の特殊性が描かれているにもかかわらず、児童向け作品として映画化、アニメ化されるまでの過程で、舞台が新世界に設定されたことを、社会的な背景から考察する。また、『じゃりん子チエ』が、これまでどのように評価されてきたかを見ることによって、この特別な地域を舞台にした作品が、なぜ全国的な人気を得るようになったのかを明らかにする。

1. 『じゃりん子チエ』の世代を超えた人気

『じゃりん子チエ』の連載開始時、物語の時代設定は同時代（1978年）のものになっている。青年誌『アクション』に登場したこの作品は、連載開始後すぐに人気漫画となり、第26回小学館漫画賞を授賞した。その後、1981年の4月には映画化されたが、配給もとは東宝、脚本・監督はスタジオ・ジブリの高畑勲がつとめるなど、児童向けアニメとしては、最高の条件で映像化されたと言える。この半年後の10月、大阪毎日放送がTVアニメ化し、関東地区ではTBSが放映権を取得、毎週土曜の夕刻五時に全国放送された。TV放送は1983年3月に終了したが、関西地区では放送終了後も幾度か再放送されており、特に関西地区での人気の根強さを物語っている。

また、『じゃりん子チエ』は、1981年には銀座みゆき座、1988年には関西芸術座で舞台化²もされている。ここで、銀座みゆき座の舞台化についての記事を紹介した

い。

人気漫画「じゃりん子チエ」（はるき悦巳・作）が舞台化される。十五日から二十五日まで、銀座六丁目の銀座みゆき館劇場が初のプロデュース公演として行うもので、プロデューサー、演出家、出演者がこの道の素人、「チエ」のファンばかりが集まった。同劇場のオーナー飯島奈美子さん（五二）が、熱烈な「チエ」ファンだったのが事の発端。（中略）「原作の味を生かすするには、素人の方が」という飯島オーナーの方針で、昨秋、全出演者を公募したところ、小三から五十代まで百三十人が応募、こうして決まったのが母ヨシ江に大屋政子さん、父テツにガッツ石松さんのほか、チエに役者の卵の東緑さん（一九）（後略）（『じゃりん子チエを劇化―ファンが演出・出演』1981年1月13日 朝日新聞）

当初、青年誌に掲載された漫画『じゃりん子チエ』は、人気が出るとともに児童向け作品として映像化されて全国的な知名度を得、さらにこれにとどまらず、舞台化された。特に、銀座という土地で、舞台化されたことは、大人向けの娯楽作品として扱われたことを証明していると言えるだろう。大人の人気のほどをうかがわせるデータの一つとして、『じゃりん子チエ』のキャラクターが商品価値を持つものとして様々な広告に起用されていたことを次の一覧で示したい。

イメージキャラクター起用、商品化一覧

1980年9月27日	中央競馬会ノミ行為禁止ポスターに小テツとジュニア（猫）が起用される
1980年10月6日	『朝日新聞』のオーディオコラム欄のキャラクターに小テツとジュニアが起用される
1988年7月	ファミコンソフト「じゃりん子チエばくだん娘の幸せさがし」発売
1996年10月	トヨタトラックのイメージキャラクターにテツが起用される

一覧表からは、チエの飼い猫の小テツとその友猫のジュニア、そしてチエの父親のテツの人気の特に高いのがわかる。テツは博打と喧嘩が生き甲斐の、生活力のない男であり、そのテツから名前をもらった猫の小テツ、そして友人の猫ジュニアは、

時折、人生の知恵者のような深みのある会話を交わすが、小テツは喧嘩に明け暮れた過去を持ち、ジュニアは自分の腕っぷしの強さを証明すべく、対戦相手を求め歩く血気者である。彼らは、こうした点ではテツとさほど変わらない。主人公のチエよりも、このようなサブキャラクターたちの起用度が高く、人気があるのが興味深い点である。

物語に登場するキャラクター達はほとんど全て地域に住む人々であり、その多くはヤクザ稼業の者達である。チエは社会のはみ出し者の大人達ともうまく付き合い、時にはなぐさめ、時には励ましたりもする。主人公のチエは子供でありながら、大人たちに意見ををするほどの良識派でもある。逆に、脇を支える大人の登場人物たちは、欠点を持ち、社会的なルールを破ることもたびたびである。物語内では、社会規範からはずれている大人が、大きな欠点を持ちながらも、愛すべきキャラクターとして描かれている。これについて、小笠原は、「憎むべき悪人が不在」³であると述べている。こうした点が、人気を得る要因となっていることは間違いない。

『じゃりん子チエ』は、大人からも、子供からも楽しめる作品となったが、物語の内容は、決して一般的な庶民の暮らしを描いたものとは言えない。主人公チエの家庭は貧しく、物語の開始時では母親が家出中、父親は喧嘩好きの博徒であり、生計を支えているのはチエ本人という、両親が健在で、子供はその保護下にあるのが当然とする価値観から見れば、崩壊状態にあるからだ。児童向けの物語の題材としては型破りと言えるだろう。しかし後に検討を加えるとおり、この作品の背景を「釜ヶ崎」と考えた場合、この設定は独自の説得力を持つものとなる。チエの家族内では、親子関係や大人と子供の役割が逆転しているが、地域社会においても、チエは大人の役割を果たしている。しかし、どんなにチエがタフな大人びた子供であっても竹本家は家庭崩壊の状態にあり、チエが暮らす地域もまた、小学生の女兒にとっては望ましい生活環境とは言えない。『じゃりん子チエ』を児童向け作品として見た場合、良書とは言えない設定はいくつも挙げられる。

主人公の父親であるテツが少年時代、鑑別所に収監されていたこと、母親が家に戻ってからも、父との関係がぎくしゃくしていること。また、チエを取り巻く町の人々にやくざ者が多いこと。そして、チエの生活上の面倒を見る保護者としては祖父母がいるが、祖母は喧嘩に強いもののテツの無軌道ぶりを抑えきれず、祖父は気弱なため、テツに甘く、何度も小遣いをだまし取られるふがない男であること、等である。テツの小学校時代の恩師は、竹本家を「異常な家庭」と言い、チエの祖父母を「失敗作の製造者」と呼ぶ。しかし、メディアはこの作品が、児童むけとしてふさわしいかどうかなど、気にしていないようだ。

では、メディアはどのような形で『じゃりん子チエ』に注目したのだろうか。次

の一覧表は、新聞や雑誌が、この作品をどのように紹介したのかをまとめたものである。

掲載新聞/雑誌	見出し
『朝日新聞』1980年5月26日夕刊	見晴らしよい叙事詩
『朝日ジャーナル』1980年8月8日号	なぜ「少女よ、大志を抱くな」なのかーマンガ『じゃりん子チエ』の原風景
『週刊朝日』1980年10月31日号	「現代人の喪失感を癒すふるとと劇画の騎手たち
『朝日新聞』1981年1月13日	『じゃりん子チエ』劇化
『朝日新聞』1981年3月2日	ひとーはるき悦巳
『週刊文春』1981年4月30日号	通天閣の見える街で生きる。ご存じチエ、テツ、ヨシ江はん、ヒラメちゃん、小鉄…みんな、いとしーイーデスハンソン、はるき悦巳対談
『朝日新聞』1981年10月2日	テレビでもチエちゃんは千夏
『朝日新聞』1985年2月20日夕刊	新人記 '85 大阪府 (20)
『朝日新聞』1997年8月2日夕刊	じゃりん子チエちゃんお疲れ様
『朝日新聞』1997年8月4日	天声人語

この中から、記事の内容をいくつか抜粋してみたい。

「作中では、小学校五年生の竹本チエが、バクチ好きの父親に代わってホルモン焼き屋を切り回し、チエを中心に、大阪・通天閣あたりを思わせる下町の、バイタリティーあふれる生きざまが展開する」(「ひとーはるき悦巳」『朝日新聞』

1981年3月2日)

「約19年にわたって大阪の下町の人情をユーモラスに描いてきたはるき悦巳さん作の人気マンガ「じゃりん子チエ」が、連載されていた「WEEKLY 漫画アクション」の五月発売の号で終わる(中略)大阪らしい人情味豊かでパワーにあふれたストーリー展開が根強いファンをつかんだ」(「じゃりん子チエちゃんお疲れ様」『朝日新聞』1997年8月2日夕刊)

「舞台は大阪の下町。登場するのは、ホルモン焼きの店を一人できりもりする小学五年生のチエ、ばくち好きのぐうたらな父親テツ、ヒト語を理解するドラ猫の小鉄(中略)徹頭徹尾繰り広げられる大阪弁、虚飾のない人情とペース」(「天声人語」『朝日新聞』1997年8月4日)

20年近くにわたる連載中、この作品は、新聞、雑誌などで幾度も取り上げられた。新聞では、朝日新聞がたびたび記事にしており、連載終了時には、朝日新聞の「天声人語」欄が、終了を惜しむコメントを載せている。新聞、雑誌記事内容を見ると、全般に共通しているのは、『じゃりん子チエ』に描かれているのが、市井の一般市民の生活を描いた、下町世界だと見なしていることである。しかし、「西萩」町が、ごく普通の下町だったなら、社会規範からはずれたやくざ、チンピラ、詐欺師などの、社会規範からはずれた大人たちが数多く登場することはなかったであろう。こうしたサブキャラクターたちは『じゃりん子チエ』の世界を彩り、展開させていくキャラクターとして欠かせない。そして、彼らは、「西萩」町だからこそ生まれたキャラクターだと言えるのだ。「西萩」は、決してありふれた大阪の下町ではないのである。では、なぜ「西萩」町を一般的な下町と見る向きが多いのだろうか。次に紹介する長尾のコメントに、その理由が見いだせるかもしれない。

彼らの町は大阪にあるという。しかし大阪なら当然あるべき通天閣が見えないのは、ちょっと不思議だった。それが、物語の舞台を現実のどこかと特定させまいとする、作者はるき悦巳氏の意図的な表現であったことは、あとから知った。つまり、この町は“事実としての大阪”の町なのではなく、“大阪的な”しかし夢の庶民の町なのである。‘

『じゃりん子チエ』の世界をどこにでもありそうな下町と見なす人々は、長尾とほとんど同じ意見だろう。つまり、そのような人々にとって『じゃりん子チエ』の

物語世界は、人々がイメージしやすい大阪的な要素を凝縮した、大阪的虚構世界なのである。しかし、はじめに述べたように、実は「西萩」町には実在のモデルがある。そして、引用の中で長尾が触れているように、漫画版のほうには通天閣が描かれておらず、アニメ版のほうには通天閣が登場する。これは何を意味するのだろうか。

2. 「西萩」町のモデル

漫画版『じゃりん子チエ』が連載漫画から映画、アニメになった時、プロットやキャラクターに改変が加えられているわけではない。漫画版では、舞台が大阪のどこかの町であるということだけがわかる描き方だが、連載が人気を呼び、映画化、アニメ化されると、映像には通天閣が映し出され、舞台が新世界に設定されているのがわかる。

作者のはるき悦巳は、新聞や雑誌に度々登場したが、モデルになった町を問われると「新世界のあたり」などとあいまいな濁し方で場所を特定するのを避けている。そこは実は「釜ヶ崎」であり、作品は自分の子供時代の思い出が反映されたものであることを認めているのは、次の2つのインタビューのみである。

「(生まれを聞かれて) 俗にいう釜ヶ崎いうとこなんです。それ、あんまり言うのいやで言うないんですけどね。一ぼくは、あそこ一向に悪いと思うてないけど、釜ヶ崎いうたら、あるイメージあるでしょ。それで、ただ、新世界の近所や、言うてるんです(中略)あのへん描きたいとかなかったんです。ただ、あんまり知らんとこ考えんの面倒でしょ。嘘描かれへんから」(『週刊文春』1981年4月30日号)

「僕は、通天閣のよく見える、大阪西成区萩の茶屋(釜ヶ崎の中心部)という、活気にあふれた町に生まれました。近くには、新世界というにぎやかな繁華街がありましたから、そこで朝から晩まで映画を見たり、ジャンジャン町というおもしろい名のついたところをうろついたりしました。子供でありながら、僕は大人の世界のなかで、楽しく遊んでくらしただけです。そんな思い出が積み重なり、組み合わせられて、「じゃりん子チエが生まれたのです。この「じゃりん子チエ」のマンガ本に出てくる人物は、この町で出合ったことのある人ばかりです。僕自身もひょっこりとどこかで顔を見せているでしょう。」(『じゃりん子チエ-西萩町よ永遠なれ-』関西芸術座パンフレット 1988年3月、p4)

はるき悦巳自ら、舞台が「釜ヶ崎」であり、物語は自分が過ごした少年時代の思い出を描いたものであることを明かしている。『じゃりん子チエ』は、映画化・アニメ化される過程で、本当のモデルが「釜ヶ崎」であったにもかかわらず、新世界へと設定し直された。なぜ、舞台が「釜ヶ崎」であってはいけなかったのだろうか。関西芸術座の公演パンフレットには、チエが住む町を現実の地図を明示して解説している箇所がある。

「チエちゃんの住む町」

チエちゃんの住む町は、下の地図のように、大阪市の西成区と浪速区と天王寺区の隣接する地域で、新世界やあいりん地区のかいわい。下町の雰囲気をもち、きわめて人間的な庶民の町である。(『じゃりん子チエ-西萩町よ永遠なれ-』関西芸術座パンフレット 1988年3月、p2)

この文章の中で、「下町の雰囲気を十分にもち、きわめて人間的な庶民の町」という部分に注目したい。なぜ、わざわざチエの町が下町で、庶民的であることを強調しているのだろうか。舞台となった地域名をあいまいなままにしておくことも可能だったはずだが、これは、作品の発表媒体の性質と関係があると思われる。関西芸術座は現在、大阪市の西成区に拠点を置き活動している。西成区はチエが住む地域と隣接しており、被差別地域も抱える地区である。劇団のパンフレットにはっきりとチエの町が明かされているのは、関西芸術座が『じゃりん子チエ』を舞台化するにあたって、自分たちの本拠地も含めた地域のネガティブなイメージを向上するための、啓蒙的な意図があると言えるかもしれない。舞台公演という発表スタイルは、観客の数も限られ、政治的な配慮が雑誌やTVアニメよりも求められないという面がある。チエが住むというあいりん地区は、古くまでさかのぼれば大正期の米騒動、そして1990年代に至るまで、大小の暴動が頻発してきた土地であり、媒体の種類によっては、その地名を出すことに慎重さが求められるだろう。

『じゃりん子チエ』の世界は、発表当時の同時代の設定、つまり1978年ということになっているが、1947年生まれのはるき悦巳の少年時代の思い出を反映したものであるならば、50年代頃の物語ということになるであろう。1950年代当時、「釜ヶ崎」は、決して子供がのびのびと育ち、素朴なホームドラマが展開されるような地域ではなかった。はるきが具体的な地名を明かさなかった理由は、50年代も現在も、「釜ヶ崎」が社会的な問題を抱えたスラムであり、差別的な眼差しを向けられる地域であったためである。

3. 新世界への移動-その背景

『じゃりん子チエ』が青年誌の連載から児童向け作品になった時、物語の舞台が新世界に移動したことについて、作者自身の口から説明がなされたことはない。おそらく、漫画が映画化・アニメ化へと商業的に全国展開されるに際し、釜ヶ崎という土地が持つイメージを払拭しようとする配慮が興業主、またはスポンサー側から働いたと考えられる。なぜなら、「釜ヶ崎」は明治以降、労働者が仕事を求めてやってくる寄せ場として都市空間の中でその位置づけが定着しており、現代においては低所得労働者が住む町として、そしてまた、スラムとして世間に広く知られているからである。では、こうした地域で展開される『じゃりん子チエ』の物語に釜ヶ崎が持つ地域的な特性は表れているのだろうか。はるき悦巳は、自分の子供時代を過ごした土地を、どのように見ていたのだろうか。次に、はるきが自分の少年時代を語っている文章を見てみたい。

「ぼくが生まれたのは通天閣の近所で（中略）昼間から仕事もせんと、大人がけっこうゴロゴロしとった（中略）ぼくはチエをかいたときに、最初、こんな子どもは珍しいとかいわれたんやけども、おれにしたらあのころは日常なことやった。実際に、友達の姉さんで皿洗いやった子、おったからね、小学校くらいから。」（「なぜ「少女よ、大志を抱くな」なのか—マンガ『じゃりん子チエ』の原風景」『朝日ジャーナル』1980年8月8日号）

「ぼく、中学まで大阪のぼくの漫画に出てくるようなところに住んでいたんやけど…こんなことまでいわないかんのかな。（中略）あの風景がぼくにとっての思い出の風景なんです」（『灰谷健次郎対談集—オオカミがジャガイモ食べて』p 23）

「釜ヶ崎」は、1950年代当時、日本の戦後復興から取り残された孤島のようにガード下にブラックが立ち並び、三疊一間の簡易宿泊所には家族世帯が住み、暴力団事務所や賭博場が多数存在し、街角ではセックスワーカー声をかけられるような地域であったという。この頃の釜ヶ崎は、都市の中のスラムとしては現在と変わりないが、異なるのは、町には子供の姿が見られたという点である（現在、男性単身者が居住者の9割を占める）⁵。

釜ヶ崎が現在のようなスラム化の道をたどったのは、大正期に入ってからである。

都市のスラムクリアランスの一環として、1903年に第五回内国勸業博覧会（明治36年）が開催されたのを期に、釜ヶ崎に隣接する村々から貧民が一掃され、その結果、釜ヶ崎に下層民が押し込められる形になった。行政によって、都市計画がなされ、都市中心部が忌避する遊郭、処刑場、被差別部落などが釜ヶ崎周辺を取り囲むように設置されたため、釜ヶ崎は現在に至るまで、社会構造的な地理環境から抜け出せず、都市空間におけるスラムという位置づけのままなのである。

戦後の釜ヶ崎の歴史に関して、特記しなければならないのは、1961年の釜ヶ崎第一次暴動である。1961年の暴動は、釜ヶ崎の労働者が交通事故に遭い、警官が被害者の生死も確かめずに放置したことから発生した。（暴動発生は1990年まで続き、大小合わせると20回以上）。これを機に、世間の関心が釜ヶ崎に集まるようになり、釜ヶ崎に不就学児が200人もいることが分かり、大きな問題となった。行政がとった対策は、釜ヶ崎の外に市営住宅を建設し、家族世帯を優先的に入居させるというものであった。釜ヶ崎から子供を隔離するために、住居を地区外へ移したのである。その結果、釜ヶ崎には単身男性労働者の比率が増大し、人が住む町というよりは、労働者をプールするためだけの、寄せ場としての空間になった⁶。

釜ヶ崎は、1961年まで、貧しく、家庭環境に恵まれない児童がいても、行政から放置されている地域だったと言える。当時の子供達をめぐる状況は過酷と言えるものであった。釜ヶ崎に居住していた子供たちは不就学児童の他、戸籍を取得していないものも多く、その理由としては離散家庭が多いこと、親の職業が不安定であったこと、そして、その安定しない地域社会に在日朝鮮人の人々が混じって暮らしていたことが挙げられる。

1961年の暴動後、町を徘徊する子供達を收容する目的で臨時にあいりん小中学校が設立された。この学校は、「釜ヶ崎」内に居住する子供で、通常の学校に通えない者一戸籍未取得児童、長い間不就学だったため、字も読めない低学力の児童、両親が相次いで家出したり、片親家庭だったりし、事実上保護者がいなく、非行に走っている児童一を対象にしていた。1962年、あいりん小中学校はバラック建ての校舎で、教職員五名、児童生徒数54名で開校した（二学期には遅れて入学してきた者もあり、児童生徒数はさらに増えた）。だが、不就学児童生徒を受け入れる学校が出来ても、「釜ヶ崎」内の住民の生活状態に変化があるわけではなく、相変わらず、昼間から町を徘徊する、学校に收容しきれなかった非行児童生徒は多数いたと思われる。あいりん小中学校は開校から11年目、在籍児童生徒数は11名となり、その後数年で廃校となる。釜ヶ崎が子供の成育環境にとって、好ましいものではなかったのは明白だが、はるき自身、自分の子供時代を振り返って次のように述べている。

「ぼくが中学まで育ったというところは、親子の関係がめっちゃめっちゃで、なんかようわからんようなところがありました。両親がいないという友達の家遊びに行くと、黒いシュミーズを着てる母親がなぜかいたりするんです」(『灰谷健次郎対談集—オオカミがジャガイモ食べて』pp23-24)

第一次暴動直前、はるき悦巳は、釜ヶ崎の外に移り住んでいる。しかし、行政が時には介入するのをおそれ、また時には行政によってスラム改善の対象とされる釜ヶ崎が、外部から見た場合、「怖い場所」であっても、釜ヶ崎という空間の内部の住民であったはるき悦巳にとっては思い出の町であるようだ。

「昼間からゴロゴロ、大人がようけおるんですよ。働いてる人、少なかったんよね。(中略) 中学一年の時に住吉に引っ越したんですけど、その直後に西成警察のところで事件が起こったりして(第一次暴動のこと)、急にワッと有名になったけど、おれなんかは、あのへん、ええ思い出ばかりあるなァ。」(『週刊文春』第23巻17号、pp60-61)

『じゃりん子チエ』の物語は、生活力のない父親、テキ屋、賭博師、詐欺師、詐欺師見習いの息子(不就学児)、家出中の母親をめぐるエピソードで彩られ、テツとヤクザとの喧嘩、決闘、ホルモン焼き屋に来る労働者とチエのやりとり、商店街の人々、子供達との交流などの地域の濃密な人間関係がテンポよくコミカルに展開され、1950年代の、まだ子供が数多く暮らしていた頃の「釜ヶ崎」の姿が反映されていると思われる。また、子供が店で労働者相手にホルモンを焼き、酒を出すなどの労働をしていることは、一般の読者・視聴者にとって、漫画的虚構世界の設定として受け取られたかもしれないが、それは、はるき悦巳自身の原体験を盛り込んだ、「釜ヶ崎」の表象であったのだ。しかし、それがはるき悦巳にとって、子供時代の幸せな思い出を描いたものであったとしても、「釜ヶ崎」が寄せ場として、貧困地区として、スラムとして世間に認知されていることには変わりなく、そうしたネガティブなイメージを払拭させるため、物語の舞台は、「釜ヶ崎」の隣接地域、新世界に設定し直されたのだろう。

釜ヶ崎は、1966年、地域の印象向上のため、行政による協議会によって「あいりん地区」と名称を改められた(行政上の地区名称ではない)。しかし、釜ヶ崎から「あいりん地区」に名称が変わっても、地域の実態は変わらず、人々の差別的な視線は避けられない。一方、新世界は明治の博覧会開催後、大歓楽街として生まれ

変わり、現在に至っている。中心にそびえ立つ通天閣は、大阪城に匹敵するような大阪のシンボルと見なされるようになった。釜ヶ崎と新世界は、隣接地域であるが、新世界は一般の人々や観光客も訪れる地域であるのに対し、「釜ヶ崎」は、被差別的な扱いを受けてきた地域の歴史性、そしてメディアの報道などによって作られたイメージのため、一般の人々が立ち入るのをためらう空間になっている。

評論家の呉智英は『じゃりん子チエ』の明るさの底に暗さが見えると指摘し、その理由をキャラクター達が社会から疎外されたマイノリティーだからだろうと決めつけている。呉は、十分な証拠を示さずに、竹本一家が被差別部落民であり、チエの親友、ヒラメちゃんを「(在日) 朝鮮人であろう」と述べているが⁷、それは、釜ヶ崎を中心とした、周囲の地区一帯を様々な社会的問題を含んだ土地と見なしているからであろう。実際に、戦前から戦後にかけて、在日朝鮮人の人々が釜ヶ崎内外にモザイク状に移り住んで根をはっている。しかし、先に述べたように、物語の舞台が新世界ならば、そこは飲食店や土産物屋が立ち並び、通天閣がそびえ、大衆演劇が催されるような、娯楽の町であり、地域が持つ暗さを一般の人々に見せることはない。そこは、人々が思い浮かべる「下町」であり、釜ヶ崎とは異なる安地帯なのである。

むすび

メディアは、『じゃりん子チエ』の舞台が新世界に設定された時、そこがモデルの町だと受け止め、「下町」という言葉を多用している。そこがもし、「釜ヶ崎」であるならば、「下町」という言葉は用いられなかったであろう。「釜ヶ崎」は寄せ場、多くのホームレスが暮らす貧困地区、スラムとして世間に認知されているからである。しかし、舞台が新世界に移動したとしても、物語の世界に変わりはない。そこに描かれているのは「釜ヶ崎」内部のことである。物語に登場する人物たちは、社会規範から逸脱した者が多く、主人公チエの家庭も、両親が子供を守るものという価値観からすれば、機能不全である。人々が「釜ヶ崎」に対しておそらく抱くであろう、ネガティブなイメージそのままである。しかし、舞台が「釜ヶ崎」ではなく、新世界となった時、そのような先入観が抱かれる危険は確実に減じたであろう。

なぜ『じゃりん子チエ』は全国的に受け入れられ、大きな成功をおさめることができたのだろうか。物語に描かれているのは、作家が子供時代を過ごした 50 年代末、つまり連載開始当時から約 20 年前の釜ヶ崎の姿である。そこは、外の世界の人々が立ち入ろうとしない空間であった。『じゃりん子チエ』には釜ヶ崎の姿が描かれているにもかかわらず、「下町」の物語と見なされるのは、舞台が新世界に移

動したことのほかに、「下町」的イメージ—商店が建ち並び、人間関係が濃密な地域—というイメージが呼び起こされたからであろう。『じゃりん子チエ』のキャラクターたちは社会規範からはずれた者たちが多いが、小笠原が「憎むべき悪人が不在」と指摘するように、『じゃりん子チエ』の世界は社会的に逸脱した者も受け入れられており、そこには濃密な人間関係が築かれていている。「釜ヶ崎」が外部からスラムとして見られていても、物語内部の住民たちは地域のコミュニケーションを大切にしており、それが「釜ヶ崎」という地名が消えただけで下町的人情に読み替えられるのが容易になったと言える。作品が児童向けに映画・アニメ化された時、舞台が新世界に設定されたのは、映画会社やTV局の政治的配慮があったからであろう。その結果、舞台は新たに設定しなおされ、『じゃりん子チエ』はより容易に、下町の物語として生まれ変わることができたのだ。

注

- 1 この地域は1966年以降、行政区画として「あいりん地区」という公的な地名がつけられた。「釜ヶ崎」という地名は現在では残っていないが、簡易宿泊所街を示す通称として用いられている。
- 2 この他、大阪の小劇場などでたびたび舞台化されているが、本論では資料が入手可能なものだけに限って取り上げた。
- 3 小笠原信「じゃりん子チエの家」『思想の科学』7月臨時増刊号、(思想の科学社、1981年)、24頁。
- 4 長尾剛『「じゃりん子チエ」という生き方』(双葉社、1998年)、1頁。
- 5 釜ヶ崎資料センター『釜ヶ崎 歴史と現在』(三一書房、1993年)、45～56頁。
- 6 前掲書、42～44頁。
- 7 呉智英『現代マンガの全体像』(双葉社、1997年)、282頁。

主要参考資料

『あいりんの教育 五周年記念号』あいりん小中学校、1967年。
磯村英一『釜ヶ崎—スラムの生態』ミネルヴァ書房、1961年。
小柳伸顕『教育以前—あいりん小中学校物語』田畑書店、1978年。
齋藤俊輔『釜ヶ崎風土記』斉藤編集事務所、1995年。
灰谷健次郎『灰谷健次郎対談集—オオカミがジャガイモ食べて』小学館、1981年。
はるき悦巳『じゃりん子チエ』(全67巻)双葉社、1979—1997年。